
森—the other day—

山本屋 葉介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森—the other day—

【Nコード】

N5656M

【作者名】

山本屋 葉介

【あらすじ】

ある日、森の中で熊さんに出会った——。現代に生きる女子高校生と人語を操る熊の出会い。人と自然とのあり方について考えたい短編小説。童謡「森のくまさん」をモチーフにしました。

フェンスを越えたあたりから、しまったとは感じていた。

スクールバックを背負い、制服のスカートについた汚れを手ではたきながら、少女はあたりを見渡した。木々の深い緑が、今頃学校に着いていれば見ているであろう黒板を思わせる。足元には、チョークで書いたように花が咲いていた。追いかけていたはずの弁当泥棒を完全に見失ってしまった。

「だからこんな田舎来たくなかったのに」

今時、どこの女子高生が山猿に弁当を盗られるなんてことがあるのか。

森林保護だか何だかの親の仕事の都合で、山頂にある学校に通うことになった初日からこれとはついていない。少女はむきになって猿を追っているうちに、完全に通学路の山道からそれてしまったのだ。そしてとうとう、向こう側に広がる森林区域に迷い込んでしまった。

「弁当ぐらいほっとけばよかった」

呟きながら自分が来た方向まで分からなくなっていることに気づく少女。まだ朝の空気が立ち込めている周囲の様子にいささか安堵する。落ち着いて動けば、夜まで迷い続けなくてもよさそうだ。兎に角この森から抜けなければ、と頭を悩ませていると、視界の隅に黒い物体が映った。少女はそれが何なのかを瞬時に理解し、青ざめる。黒い巨体のそれは、少女に近づいてきた。

——熊、だ。

なんのためらいも無くゆっくりと近づいてくる熊に、少女は凄まじい恐怖を覚えた。少女の本能が衝動的に駆け出そうとするのを、悲しいかな過去の知識が止める。

——熊に遭ったら死んだふりをせよ。

意外にも少女の理性は、主とは別個の存在かと錯覚するほど冷静な働きをする。どこがソースなのかも分からない情報を吟味し始めた。確かに、ここで闇雲に逃げ回って、より深い森の奥に迷い込むよりはそのほうが良いかもしれない、と。

その間にももちろん、熊は近づいてくる。少女はどうとう逃げだせる距離を失った。完全に混乱していた少女は、死んだふりも中途半端、中腰で腰を抜かしたように情けない姿勢のまま、硬直していた。立ち往生ならぬ、中腰往生、なんて熊に理解を得られるわけも無い。それでも少女は呼吸を止める。

熊は、少女の体すれすれをぐるりと一周し、匂いを嗅ぐ。

少女はだらだらと嫌な汗を流しながら、早くも走馬灯なるものを経験していた。

少しの間を永遠に感じていた時、少女は声を聞いた。

「人間、何故逃げない」

死んだふりを——と説明するために口を開きかけて、少女はなにか違和感があることに気付いた。それは声の出所をたどることで半ば解決した。

「聴いているのか？何故逃げない」

熊が人語を発しているではないか。

その瞬間、少女の足は物凄い勢いで駆け出していた。現実では起こりえない現象に体がようやく防衛本能を発揮したらしい。

同時に、死の覚悟で抑えられていた恐怖が、助かる可能性に反応して少女に悲鳴を上げさせた。誰かに声が届くことを期待してか、少女は自分でも信じられないほどの大音量で叫んでいた。それはほと

んど意味の無い喚き声としてあたりにこだまする。すると熊が後ろで何か叫んだ、少女の恐怖がさらに大きくなる。

「おい、待て人間！止まれ」

逃げる間を与えた本人（本熊？）が何故か後を追ってくる。そのせいで、方向も考えずにひたすら走っていた少女は、どんどん森の奥地に入り込んでしまった。

＊

周りの木々は、神社の御神木を思わせるほど逞しいものが並び、その幹に茂っている苔やシダが地面にまで広がっている。空気はさらにしっとりとしてきた。悲鳴を上げるのも忘れて走っていた少女だったが、木の根とシダに足をとられ、派手に転倒する。立ち上がり、走り出そうとしたが、脛と腕を強打していたためにその場にへたり込んでしまった。しばらくして熊が少女に追いつく。

「落し物だ、人間。」

熊は口にくわえていた小さな紙袋を地面に置くと、少女にそう告げた。白い小さな紙袋には、『海の家』と印刷が入っている。間違はなくそれは、少女のものであった。前の学校の親友が、餞別としてくれたのだ。かばんの外ポケットに入れっぱなしだったので、逃げる時に落ちたらしい。

「何だか知らんが、森を汚すな」

「……」

熊のほうは、くたびれている様子も無く、冷静に話しかけてくる。少女は疲れもあってか、しばらくは乱れた呼吸を整えるので精一杯だった。同時に恐怖が薄れ、全身の筋肉が緩んでいくのを感じていた。脛の痛みに耐えながら、ようやく口を開く。

「…あなたは、何なの…？」

何を言ったらいいのか分からず、少女は素直に疑問をぶつけた。あとから自身で思ったことだが、言ってから抽象的過ぎたかな、と心

配できたほど、そのときの少女は落ち着いていた。

熊は軽く首をかしげ、黒い瞳でまじまじと少女を見た。

「おれからすれば、お前こそ何だ。何をしにここへ来た」

異形の存在に、質問を質問で返され、少女はまた混乱する。頭の中がぐちゃぐちゃになってしまったので、やけくそな返答をした。

「わからない、そんなの、こっちが知りたいよ」

すると熊は、グフグフと鼻を鳴らし始めた。犬のそのように舌を出し、はあはあと呼吸をしている。少女は何が起きたのか理解できず、しばらくその様子を見守っていた。

「…ねえ、もしかして…笑ってるの…?」

熊は鼻を鳴らすのをやめると少女に顔を近づけ言う

「ああ、そうだ。すまん。人間、なかなか興味深い生き物だな。自分がいったい何者であるか、何をしに来たのかさえわからんとは…。実に愚かだ」

あれが熊の笑いなのかと驚きながらも少女は熊の言葉に怒りを覚えた。熊などに人間を馬鹿にされたくないと感じたのだ。それに、さつきからこの熊は少女のことを人間と呼んでいる。

「あなたなんか言われたくない。それに人間人間って呼ばないでよ。あたしにはちゃんとした名前があるの」

少し距離をおいてから、少女は熊にそう言った。熊はまた鼻を鳴らしながら少女を見つめる。名前を聞こうとは思えないようなので、少女は名乗らないでおくことにした。熊が言う。

「それより、これを持って帰れ。お前が落とした物だ。森にあるベキものではない」

地面に置いた紙袋をもう一度くわえ、少女の胸の前に突き出す。少女が普通に立っていて、四つん這いの熊の額が少女の首あたりにあるのだから、もし熊が立ち上がれば相当な大きさだろう。少女の中にまた、一握りの恐怖がよみがえる。少女は恐る恐る熊の口から袋を受け取った。

「ありがとうございます」

熊を怒らせたなら殺されるかもしれないという思いから、今更だが敬語になる少女。熊はそれまで同様、特に気にする様子も無く続ける。「もうおれはお前に用は無い。見たところお前は、猟師でも開拓業者の人間でもないらしい。何をしに來たのか知らんが、早くここから立ち去れ」

そう言う熊は、元來た道を振り返った。少女は急に心細さを感じた。とたんに脛の痛みが戻ってきた。ゆっくりと帰っていかうとする熊に向って叫ぶ。

「待つて！あたし、…道に迷ったの」

まさか熊に命乞いをするような情けないことになるかと少女は思っていなかった。すると熊は立ち止まり、少女の方を振り返った。そして首を傾げた。

「なんだ、迷い子か。悪いがおれは縄張りからあまり出ない性質タチだな。人間の住処のある方向は知らない」

「そんな…。あつ、もしかして…」

少女は突然、自分のかばんの中を探り始めた。

今日受けるはずだった授業の教科書やノートの他に、筆箱、ポーチなども入っている。その中から少女が取り出したのはうすいブルーの携帯電話だった。少女は、もしかすると繋がるかもしれない、という期待を込めてそれを開いた。

携帯の表示は、圏外。この状況から考えれば、まあ当然のことではあった。落胆する少女の横顔を見ていた熊は、携帯電話に興味を抱いたのか、近くまで戻ってきた。

「人間は不思議なものを持っているな。しかしどんなに便利でも、いざという時に使い物にならんのでは意味がなからう」

圏外の表示の隣ではデジタル時計が昼を知らせている。本来の目的であった弁当はどうに猿の腹の中に違いない。猿に対する怒りと、迷ってしまった自分への怒りが空腹を刺激し、熱を生む。そこに熊の言葉が追い討ちをかけたのだ。少女はきつ、と熊をねめつける。

「うるさいな！こんなものなくなつて、帰れるわよ」

そう言って、携帯電話をスカートのポケットに移していると、紅くてつやつやとしたヒョウタンボクの実が少女の目に映った。瓢箪のように、二つの赤い実が一つにくっ付いているのが可愛い。瑞々しくておいしそうだ。少女は思わずそれに手を伸ばしていた。それを見た熊がほえる。

「そいつを食うな人間！その実は毒だぞ！」

少女はその声にびくりと体を震わせた。

「……毒、が…？」

驚いているせいか、少女の声がかすれる。熊が、その巨体をもって少女をヒョウタンボクから押し退けた。

「おれはこれを食べたことは無いが、前にここに來た人間がこれを食べって意識を失っているのを見た」

そいつは仲間に運ばれていったがその後どうなったかは分からん、と付け加える。少女の顔がみるみる青ざめていく。だが、腹の虫だけはひたすら正直だった。少女の腹が切ない悲鳴を上げる。熊は黒い瞳をくるくる動かしながら少女を見、

「そんなに腹が減っているなら、おれについて来ればいい」

とあの不思議な笑い方をしながら言った。少女はいよいよ大人しく熊に従うしかなくなってしまった。

＊

「こいつを食いな」

熊は器用に木に掴まり立ちをし、アケビを取ると少女に渡した。ぱっくりとあいた中に、黒い粒々が透けて見える白い塊が入っている。少女はそれをしげしげと眺め、食べれるのか、と聞いて、熊が頷くのを見るとようやく口へ運んだ。奇妙な見た目とは裏腹に、甘くておいしい。少し種が多い気がするが、兎にも角にも、少女の空腹は紛れた。

「ありがとう」

「足を痛めたんなら、その小川で冷やすといい」

熊は少女の脛の辺りを見ながら言う。少女はもう痛みを感じていなかったが、ころんだ時にあちこち汚れたままだだったので、頷き、もう一度ありがとうと繰り返した。

木々の隙間から降りてくる太陽の光が、水面にきらきらと反射し、眩しい。少女は苔や泥がついた靴下を脱いで、大きな石の上に座ると水に足をつけた。透き通った流れに足を泳がせながら、これから自分はどうなってしまうのかについて思考する。

「ねえ、あたし、帰れるよね」

唯一会話ができる熊に、それとなく話しかけてみた。熊は素っ気無い返答をする。

「さあな、おれにはわからん」

少女はむっとしてさらに言う。

「こんな奥まで迷い込んだのは、あなたにも責任があると思うんだけど。いきなり出てこないでよ。それに、どうして人の言葉がしゃべれるの」

すると熊は、人の言葉だと、と驚きの声をあげた。

「これはおかしいことがあるものだな。おれにはお前のほうが熊の言葉をしゃべっているようにしか聞こえない」

「熊に言葉があるの？」

今度は少女が驚く。熊は今度は笑うときとは違う鼻の鳴らし方をした。怒っているのかもしれない。

「人間よ、お前等が何をどこまで知っているつもりでいるか知らないが、あまり調子に乗っているといつかひどい目に遭うぞ」

低い声で唸るように言ったかと思うと、最後は笑いながら少女に鼻を近づける。少女は思わず退けぞった。熊に限らない、獣特有の体臭がしていた。

「ちよっと、獣臭いよ」

すると熊は自分の匂いを嗅ぎ始めた。最近の水浴びもあまりしていないのだと言う。少女が体を洗うよう勧めると、そうだな、と呟き

ながら小川に入っていく。自分で体を洗えるものなのか心配になった少女は、「手伝おうか」と、ポケットからかばんへと携帯電話を非難させた。その時、一緒に入れていたあの紙袋が落ちて、流れていきそうになる。少女が慌てて拾おうとするより先に、熊がそれを捕まえた。

「まったく、よく落とすな。いったい何が入ってるんだ？」

言いながら少女の手に乗せてやった。少女は少し考えて、袋を開けて中のものを取り出した。

出てきたのは、小さな白い貝殻のついたイヤリングだった。熊の目の前に持ってくる。

「友達から貰ったんだけど…。あたし、こういうの似合わないから、かばんに入れっぱなしだったんだ」

熊相手にこんな話は変だなと思いつつも、いつの間にか少女は、ごく自然に熊と会話していたことに驚愕する。それでも、興味深そうにこちらを覗き込む熊の姿を見ると、まるで前からこんなことは当たり前であったかのような錯覚を覚えた。

白い貝殻が風になびいてさらさらと音をたてる。その度に眩しくきらめいた。少女は目を細める。熊が不思議そうに言う、

「きれいだな、何故似合わないときめる？もったいないだろう」

少女はつけなくても分かるのだ、と言うとポケットにいったんしまいいこみ、ざぶざぶと熊の巨体に水をかけた。ずぶぬれになった熊はなんだか少し貧相に見えた。少女は水から上がり、かばんの中から紐を取り出す。その間に、熊は何度か体を大きく震わせて水しぶきを飛ばした。それらが光をあびて一瞬だけ虹を生み出す。

「これ、片方だけあなたにあげる。他にお礼に出来そうなものないし」

少女はイヤリングの片方を取り出してきた紐にくくりつけ輪っかにし、熊の首に掛けてやった。

熊は黒い瞳をまた、くるくる動かしながら少女を見、次に自分の首に掛かっているものを確認しようと体を動かした。なんだか楽しそ

うに見える。

「なんだか妙な気分だ。これはおれに似合っているか？」

体の大きい森の熊が、白い小さな貝殻を首元にぶら下げているのは、たしかに不思議な光景であった。少女はちよつと考えてから言う。

「うん。似合ってる」

「そうか、ありがとう」

熊の言葉に笑みがこぼれた。熊は少女の顔を見つめてから、鼻を鳴らして笑った。

「体を乾かそう。日当たりの良い場所にいけば、帰る道が見つかるかも知れない」

熊が言う。少女は頷き、靴をはく。随分と気が楽になった。もう一度携帯電話を開いてみる。もう夕方が近いが、夏であるせいか空はそれほど時間の経過を感じさせなかった。少女と熊が並んで、森の中を歩いていく。

＊

森がだんだん開けてきた。そこまでの道で、楽しげな鼻歌が響いていた。少女が歌っていたのは『森のくまさん』のメロディーだ。小さい時に幼稚園で習ったつきりにしては、結構記憶がはっきりとしていた。

「やけに楽しげだな。朝とは大違いだ」

熊が呆れたように言う。そう言う熊も楽しそうであったが、森が開けてくるとそわそわし始めた。

少女は、熊が縄張りからあまり出ない、と言っていたのを思い出していたが、特別気に留めることはなく、獣道を進む。携帯電話のアンテナをピンと立て、半ば振り回すようにして電波のキャッチを試みていた。

「あなたと会話してたら、他に怖いものがなくなったんだよ」と鼻歌を混じりに言う少女。そんな少女の様子を見て熊は、

「じゃあもう大丈夫だな。おれはそろそろ引き返そう」

と言い立ち止まる。鼻歌を歌っていた少女は遅れてそれに気付き、慌てて立ち止まり、熊の方を振り返った。

「待ってよ！まだ帰れるかわかったわけじゃ…」

少女はいつものまにか、なんとかして熊を引き止めたいと考えていた。それは無理なことだと理解していたが、せめて携帯電話が使える状態になるまで、と。

とっさに携帯電話の表示を確認する。すると、小さいのが一つ、立っていた。

「電波がきてる…」

少女は喜んだ。しかし、心の中のどこかにそれと真逆の感情が見え隠れしていた。

もう少し、話したい。

「ねえ、」

少女が携帯電話から熊のほうに視線を戻す。熊はこちらを寂しそうに見つめていた。熊が別れのあいさつを述べようとした瞬間、何かが破裂するような音が響いた。小さな爆発のようにも、聞こえた。熊の表情がこわばっているように見える。

少女はなんだろう、と首を傾げた。熊の巨体が大きく傾き、地面が揺れた。熊の体には注射器に似たような……テレビでも見たことがあるものが突き刺さっていた。

声も忘れて駆け寄る少女。ようやく、何が起こったのか理解した。

熊は麻醉銃で撃たれたのだ。

こちらへ人の声と足音が近づいてきているのがわかる。少女は熊の体を揺すった。

「嘘…ねえ、まだ、話したいことが」

泣き出しそうになりながら、少女は熊の体を揺する。すると、熊が

呻いた。そしてグフグフと弱弱しく鼻を鳴らした。

「何が可笑しいのよ……！」

少女は熊にしがみつくと、熊がゆっくりと寝言のように語った。

「お前は、これで、帰ることが出来る。おれとは……お別れだ。おれがもし、生きていたら、また会える」

だからその時は、一目でお前と分かるように、そのイヤリングをしてきて欲しい、とゆっくりかすれていく声で続けた。少女は何に對してかわからないが、首を横に振る。熊は麻酔が効いたのか、「ありがとう」と一言いったきり、眠りについてしまった。

人が駆け寄ってきたことに気付いた少女はゆっくりとそちらへ振り返った。聞き覚えのある声で怒鳴られる。

「何をしてるんだお前は！すぐに離れなさい！」

そこに立っていたのは少女の父親だった。仕事仲間が大勢集まってくる。学校に来ていないと連絡があつて探していたんだぞ、と少女を支えて立たせようとした。少女がその手を振りほどく。

「離して！なんで！なんで撃ったの！」

父親は驚いた顔をする。少女は拳を硬く握り締め、ぶるぶる震わせながら肩で息をし、物凄い形相で父親を睨み付けた。

「撃たなければお前は熊に殺されていたんだぞ」

「殺さない！さっきからずっといたんだ！」

何を言ってるんだ、と周りの仲間も互いに顔を見合わせている。父親は何とかして少女を落ち着かせようとした。きっと襲われそうになった恐怖でおかしくなったのだろう、と。

「怖かったんだな、もう大丈夫だ。熊のほうも眠っているだけだ。お父さんの仕事は森の自然を保護することだと知っているだろう？森に人間の意思は通じないからな、時に人を襲うことがある。森と

人がうまく生きていくためには何かと工夫をしなければいけないだ」

そう言って麻醉銃を撫でる。少女は一層怒りを増したようで、ふらふらしながらも父親に掴みかかろうとした。父親の仕事仲間である女性がそれを止めようとする。

「違う！全然分かってない！こっちの意思が伝わらない？そんなの伝えようとしたことなんてないくせに！襲うことがある？話を聞いてくれて叫んでる声も聞いてあげないで、眠らせて、黙らせて、檻に入れて保護？全部ただの人間のエゴだ！」

体を抑えられながらも父親に、人間に対して、少女は激怒した。少女の涙を森の緑が穏やかに飲み込んでいく。父親は少女の言葉の間にだんだんと顔を歪めていく。仕方のないことだ、と苦し紛れに呟く。

「森に、他の生き物に、人間の言葉は通じない」

「通じたんだ、あたしはちゃんとあいつの言葉が解った。言いたいことちゃんと解ったんだ。伝えたいと思ったら伝わるんだ」

少女の声はもうほとんど枯れ、泣き声にしかなくなっていなかった。最後、父親を睨み付けた少女はそのまま気を失い、病院に運ばれた。

＊

森に自然保護活動をしている人間を乗せた一台の軽トラックが到着した。中から一人の女が出てくる。動きやすそうな軽装で、白い貝殻のイヤリングを片方の耳にだけしていた。そのままの格好で奥に入っていくこうとする女を、仲間が車から呼び止める。

「危ないですよ。熊が出るかもしれません」

そう言って、女に銃を渡そうとした。女はそれをじっと見つめ、仲間に向かって言う。

「あたしはいいわ。ここは一度来た森だから。」

仲間は困った顔をする。

「もしもの時どうするんです？熊語でも話せるならわかりますが……」
他の仲間がくすくすと笑う。すると女は妙に自信に満ちた顔をして仲間と言った。

「話そうと思えば、話せる。伝えたいと思うから」

仲間はきょとんとしている。女は銃を差し出している仲間に微笑みかけると、森の奥のほうへ向き直った。少し離れた位置にある茂みが揺れ、黒い巨体が現れる。仲間が慌てて女を車へ引き戻そうとするよりも早く、女は黒く大きな熊のほうへ歩いていった。

「久しぶりだな。また迷い子か」

熊が口を開いた。その胸元で少し汚れた白がのぞく。女は嬉しそうに熊に抱きつく。仲間がその様子に驚愕している。

「会えてよかった。……体、洗ってるんだね」

グフグフと鼻を鳴らす熊。女の耳元で揺れるイヤリングを見て言う。

「それ、似合っているじゃないか」

「ありがとう」

女は熊の瞳を見つめると味のある笑みを浮かべた。風が吹いてきて、女の長い黒髪を揺らす。彼等をつつむ森の木々が揺れた。

初めて出会った時のように、熊が問う。何故逃げない、ここへ何をしに来た、と。女は一度、仲間を振り返り、笑いかけるとまた、熊のほうへ向き直った。

「森と話しに来た。私達のことを伝えに。」

そうか、と熊はまた笑う。森の中を爽やかな風が過ぎていった。

——ある日、森の中で、女は熊に出会った。

——熊の言うことにゃ、お嬢さん。少し話を聞いてくれ。

——おれたちは、お前達と話がしたいんだ。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5656m/>

森—the other day—

2011年1月29日10時25分発行